

## 令和6年度「不登校に関する研修会」(第2回) 講義記録

- 1 日 時 令和6年8月6日(火) 10時から16時
- 2 場 所 県立兵庫津ミュージアム
- 3 講 師 姫路市総合福祉通園センター 小児科医 小寺澤 敬子 先生
- 4 テーマ 「大人になる前に考えておきたいこと  
～その子らしく大人になることを支援する～」
- 5 内 容
  - (1) 「こども」は「おとな」になる
    - ・障害の有無に関係なく全ての子は成長する。
    - ・外から見える成長と、外からは見えない情緒面の成長がある。
    - ・子どもはそれぞれの特性をもち、環境(家庭・園・学校・地域など)との相互作用で育つ。
    - ・学校は社会に出て行くための土台を作る場所である。自分にできること、できないことを理解し、モチベーションをあげるものを見つける。
    - ・初診時保護者の困り感は、「言葉のおくれ」が最も多く、次に「落ち着きがない」、「癩癩をおこす」と続く。
    - ・本人(小学高学年)の困り感は、「我慢して他の人に合わせていること」が最も多く、「自分の思いや感覚がみんなと違うこと」、「頑張っているのにできないこと」・「自尊心が低下している」と続く。
    - ・トラブルが多いと行動観察に目が向き、内面に目が向かなくなってしまうがちになる。
  - ア 子どもたちのことば
    - ・どこで笑って良いか分からない。
    - ・「困ったら言ってね」と言うが、いつ言えばいいの? 等
  - イ 診断基準
    - ・時代によって、診断基準は変わる。診断基準は行動観察から行う。
    - ・原因は分からないことが多く、明瞭な境界線は引きにくい。
    - ・診断を受けることが支援のスタートではない。特性(強み、弱み)の理解がスタートである。
  - (2) 子どもたちの気づきを支援する
    - ・高学年になると、できないことが増えマイナスの自分として自己認識してしまう。
    - ・診断名を親が告知するが、どう対応したらよいか分からないままの子どもが多い。
    - ・自分の長所や短所を考える…長所と短所は表裏一体であることを認識する。
    - ・自分を知る…好き/嫌い、楽しい/疲れる、得意/苦手 等  
苦手なことを頑張るのはしんどい。好きなことを伸ばす。
    - ・自分の体のタイプを知る…どんなときに疲れやすいか等の理由が分かれば楽になり、自分で対処する方法が見つかる。
    - ・自分の状態に気付く…問題や不安の強さを数値化し、客観的に考える。
    - ・鏡を見る…自分の気持ちと表情が一致していない子は多い。どう見られているか気付く。
    - ・自分に合った方法で対処する…自分で見つけられるものではないので、サポートが必要である。

- ・支援の目的は、「大人になってから自分らしく社会生活が送れること」「自己肯定感、自己有能感を持てること」である。
- ・自分を正しく理解し、自分に気付く。
- ・自分を理解していく過程に支援者は寄り添っていく。
- ・気付きを支えてくれる物、人は何かを知る。

(3) 関わり方を考える

ア 褒めるとき（褒める→認める→感動する）

- ・特性から褒める。その場で褒める。気付いていることを知らせる。
- ・アイメッセージで伝える（びっくりした、感動した等）、なぜ良いのか伝える。
- ・時間軸で考える。前の自分と今の自分を客観的に知らせることが大切。

イ 叱るとき（叱る→教えるため→肯定的に伝える）

- ・困っていることに目を向けるのと同時に理由を見立てる。
- ・伝えるための関係をつくる。
- ・ストレスのない居場所づくり（家・学校・習い事・デイサービスなど）

ウ トラブルが起こったとき

- ・特性から子どもの感情を受け止め、気持ちを共有し、時には適切な言葉で代弁する。
- ・感情が悪いのではなく、感情のまま行動することが悪いことに気づかせる。
- ・大切なのは、説得ではなく本人の納得。

エ 自分の関わり方を振り返る

- ・子どもは「何で」「どうして」と疑問で聞かれると叱られていると感じ、答えにくい。
- ・子どもの思いは簡単には分からない。何もしないで、そばにいることが大事なときもある。

オ 癩癩・こだわり・気になる行動（身体症状も含む）が増えたとき

- ・そうしてしまう理由を考える。

(4) 発達障害に対する薬物療法

- ・薬物療法は根本治療ではない。何をターゲットに薬を使うのかを考える。全てに対処することはできないと理解する。子どもが不利益を被らないように使用する。
- ・効果や副作用は個人差が大きく、関わる人の協力が必要である。
- ・目標は症状が出なくなるのではなく、折り合えるようになることである。そのための手立ての一つである。

(5) 支援の目標

- ・大人になったときに、「まあやれてるよな」と思えるほどの自尊心を持ち、自分のことを知り、リラックスできるものがあり、何か困ったときに相談できるようになる（人への信頼感がある）ことである。

(6) その他

- ・感情と表情にずれのある子へのアプローチの方法としては、ずれていることを理解している大人の存在が大切である。支援者は、本人が違っていることに気づけるよう、伝えたり教えたりすることも必要である。

（記録：県立但馬やまびこの郷）